



県立広島大学 Prefectural University of Hiroshima

地域連携センター報

Vol. **22**

COMMUNITY LIAISON CENTER

平成28年3月20日発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号 電話082-251-9534 E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

学術講演会「里山資本主義から見た庄原の未来」

庄原地域連携センター所管の今年度の学術講演会は、しょうばら産学官連携推進機構との共催、庄原市の後援のもと、里山資本主義で有名な(株)日本総合研究所主席研究員の藻谷浩介氏を講師に「里山資本主義から見た庄原の未来」のタイトルで、11月20日に庄原グランドホテルで開催しました。市民77名を含む262名が会場に訪れました。講演の最初に庄原市の矢吹有司副市長より来賓挨拶をいただきました。

講座では地域活性化として「人口がこれ以上減らず、若者が戻ってきて子どもが生まれ続けること、誇りを持って地域を残すこと」との指摘が最初にあり、次に庄原市の人口の今後の推移が広島市や東京都、中華人民共和国との比較のなかで提示され、人口減少が広島市や東京都の30年先を行き、70年後には人口がゼロになるペースで進んでいる厳しい現状を述べました。さらに65歳以上の人口の増減率と15歳から64歳の人口の増減率が提示され、県内の近隣の市町との比較から、庄原市よりも交通の便等不便と思われる北広島町や大崎上島町が15歳～64歳の増減率が良いこと等が示されました。そこにはまだ庄原市にはできることが多くあるとのメッセージが込められていました。



続いて、全国のデータが示され、熱海市や伊豆など交通が便利で観光も盛んな有名な自治体でさえも高齢化と人口減少が進んでいることが指摘され、鳥根県海士町や北海道猿払村などの交通が不便なところでも元気なところは元気であるというデータが提示されました。その理由として藻谷氏は、「地消地産」をあげ、これまで「地産地消」が言われてきたが、まずは地域のモノを地域で消費することが重要だと話しました。「講演に行く地域の水を使ったペットボトルではなく、外国産のペットボトルが出てくる。地域活性化を望むのにどうして外国産を講師に飲ませるのだ」と訴え、地域外に出ていくコストを減らすことの重要性を主張しました。

里山資本主義とはマネー資本主義の反対語で、お金にならない価値も重視し、循環再生で社会を維持するもので、「客数」や「売上」よりも「地域内でどれだけお金が回るか」を重視するものだとされています。庄原市の一人の年間消費額が200万円とした場合、その1%の2万円を外部の商品から庄原産の商品へ変えるだけで約8億円が地元を回ることになると試算しました。地元の商品を買うことは簡単なことではないですが、深刻な現状に目を向け、努力することが望まれ、里山資本主義で循環再生を復活させることが必要だと述べ、講演を結びました。データに基づく講演で、講演終了後も多くの市民、学生が個別に講師に質問を行っており、盛況な学術講演会となりました。

広島キャンパス

HIROSHIMA CAMPUS

地域連携・産学連携

〈吉田高校神楽部公演〉

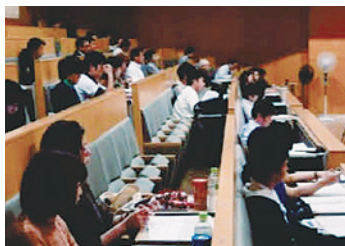
県立吉田高校神楽部による神楽公演を、今年も、紫苑祭（広島キャンパス大学祭）初日の10月11日に開催しました。今回の演目は「滝夜叉姫」で、本公演では5年ぶりの上演ということもあり、新鮮に感じられた来場者も多かったようです。来場者数も増え、とくに若い方の来場が増加しており、昨今の神楽人気の拡がりを感じられました。



「滝夜叉姫」上演の様子

〈第1回創業セミナー〉

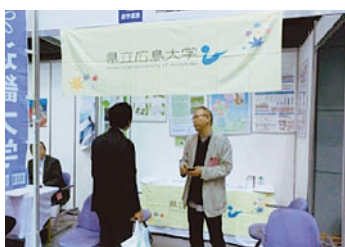
10月23日、広島キャンパス大講義室において、特別講座 第1回創業セミナー「創業について学んでみよう！～夢をカタチに～」を開催しました。講師に有限会社ウェブ 経営コンサルタントの藤田悠久雄氏をお招きし、「成功する創業者とは」、「成功する創業とは」の内容でお話いただきました。100名近い参加者があり、この分野への関心の高さが伺える講演会となりました。



会場の様子

〈信金合同ビジネスフェア〉

第10回広島県信用金庫合同ビジネスフェア2015が11月17日に広島グリーンアリーナで開催され、本学ブースでは、地域の自治体や企業と共同で研究開発を行った成果物（蔵出し梅酒ケーキ、「ちしゃとう」製品、むくみ対策靴下、三原シュトーレン）を紹介しました。悪天候にもかかわらず多くの方が来場され、本学ブースにも多くの方にお越しいただきました。具体的な事例を挙げて説明することで、本学の地域貢献活動についてより理解を得られたのではないかと考えています。



来訪者への成果の紹介と説明

〈自治体意見交換会〉

包括連携協定を締結している9自治体（7市1区1町）との意見交換会を、11月26日に広島キャンパスで開催しました。本意見交換会は、それぞれの意見や意向、情報等を密に連絡し合い、より効果的に連携し成果創出を目指す目的で開催しています。本学が各自治体と協働で実施している事業の進捗報告を行って成果創出を図ると共に、本年度は総務省中国総合通信局より講師をお招きし、自治体に関わる国の施策等についての講演を行いました。



意見交換会の様子

知的財産

〈知財セミナー〉

11月12日に知財セミナーを一般社団法人広島県発明協会と共催しました。広島県発明協会の特許入門セミナーの講師を務められている株式会社テンパール工業 鎌田武先生を講師としてお招きしました。「研究者のためのはじめの特許」と題し、特許制度や特許調査方法を中心に分かりやすくお話しいただきました。講演後、知財本部より発明届の書き方や出願手続きについて説明しました。



公開講座

平成27年度後期は歴史・文学・文化系の講座として、「世阿弥自筆能本で能を読む」、「小早川隆景の生涯」、「読み切り文学講座」、「海に開かれた都市・広島一城下町建設以前の広島湾をめぐって」、健康科学系として「ロコモティブシンドローム予防のための運動のすすめ」、「人体の仕組みから健康を考える」、経営学系として「労働法と中小企業金融から地域活性化を考える」、情報系として「ITパスポート試験対策講座」、総合教育センターの教養講座として「『家族』のあり方を考える」を開講しました。また、3年目を迎える広島市立大学との連携公開講座「社会人のための英語再チャレンジ」を行いました。

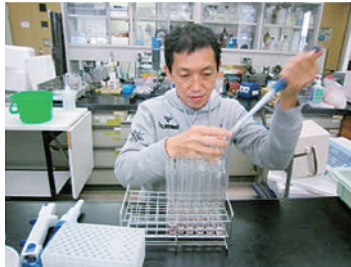
広島キャンパスでは、平成28年度も多彩な講座を提供していきます。

研究紹介

食品加工・醸造および食品成分に関する研究

人間文化学部健康科学科 教授 谷本昌太

食品においては、その品質を決定する上で最も重要な因子の一つです。釣ったばかりのお魚はほとんどにおいがありますが保存している間に生臭くなっていきます。この変化には脂質の酸化により生じる成分が関わっていると考えられていますが、まだわからないことも多くあります。そこで、本研究室ではお魚の貯蔵・加工中における魚の脂質酸化やにおい成分の変化を明らかにする研究を行っています。



一方、パンの製造には酵母という微生物が必要です。現在、米の消費拡大や小麦アレルギー患者のために米粉を100%使用したパンが製造されています。ここで使用されている酵母は、小麦パン用のもので、自然界には米粉パン用に適した酵母が存在する可能性があります。そこで、農産物等の身近なものから新規なパン酵母の分離・選抜を行っています。

このように、食品学研究室では食品加工・貯蔵時に生じる諸現象の解明や新たな食品素材・材料の開発を化学的な切り口で行っています。したがって、①新規食品および食品素材の開発、②食品製造工程の改善、③新規食品製造工程の開発等について地域や社会と連携できればと考えています。

生産システムの効率的な運用方法に関する研究

経営情報学部経営情報学科 准教授 広谷大助

私の研究室では、生産システムを対象とした効率的な運用方法を研究しています。具体的には作業者をどのように配置し、どのような規則で作業を行えば効率的に生産できるかについてEXCELやプログラミングをすることによって求めています。特に重点的に研究している題材として自己バランスラインがあります。これは特別な管理や制御をしなくても作業者を特定の並びで配置し、決まったルールに従って作業するだけで、自然に作業者同士間でバランスがとれ、効率的な生産が行えるラインです。このラインに対し、種々の条件を付加した際にどのようにしてバランスを取ることができるかを研究しています。このラインは主にアパレル産業や配送倉庫に用いられていますが、その他にも飲食店やアリの生態などにも応用されており、適用は広範囲に渡ります。



また、対象を生産システムに限らず供給者から顧客までを1つの鎖（チェーン）で結び全体最適化を図るサプライチェーンについても研究しており、その中でも特に総コストを最小化するための効率的な在庫管理手法についても研究しています。

このように広い意味での“生産”について研究しています。私は現在広島キャンパス所属ですが、出身は庄原で実家は庄原キャンパスから車で10分のところにあります。その点でも特に県北で地域貢献できればと考えています。

広島交響楽団特別講義

11月30日に広島キャンパスで広島交響楽団特別講義を行いました。本学は広島交響楽団のキャンパスメンバーズ制度に加入していますが、その特典の一つに楽員による特別講義があります。

今年度はオーボエ奏者の板谷由起子さんが「一人の音楽家として、母として」というテーマで、オーケストラの編成、オーボエのこと、リードのこと、これまで歩んで来られた音楽家人生のことなどを、演奏を交えてお話しくださ

した。

「何かを続けていると、それは『道』になります」、「今日の自分は必ず未来に続いています」ということばは、オーボエのあたたかい音色とともに、学生たちの心に深く残りました。



庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

地域貢献

果実酒および甘味果実酒の酒類試験製造免許を取得

庄原キャンパスのある備北地域では、ブドウ、リンゴ、イチゴなどのフルーツが栽培されており、特産品として販売されています。生命環境学部生命科学科藤田研究室(果樹園芸学)では、これら特産品フルーツの利用や備北地域の気候や土壌に適したワイン製造用ブドウ品種の選抜、果実からの酵母の単離、使用する酵母の選択などを行い、果実酒の商品開発を目指しています。

果実酒などの酒類の製造は、酒税法によって一般に禁止されています。そのため、これまで本学での酒類の製造はできませんでした。そこで、広島国税局庄原税務署へ酒類の試験製造免許の申請を行い、平成27年9月14日から平成30年3月31日まで、庄原キャンパス食品加工場内で果実酒および甘味果実酒の試験製造ができるようになりました。

昨年10月には、庄原キャンパス内の試験圃場で栽培された生食用ブドウ品種‘ピオーネ’と醸造用ブドウ品種を収穫し、様々な醸造条件で赤ワインおよび白ワインの仕込みを行いました。今回、初めての仕込みだったため、機器の使用方法や仕込み手順の確認をしながらの作業でした。現在、アルコール発酵は終了し、澱下げを行っています。その後、製造したワインの化学分析を行い、さらに、希望者を集め、食品加工場にて官能検査を行う予定です。また、庄原市高野町のリンゴを使ったリンゴのお酒(シードル)の製造も予定しています。得られた研究成果は、地域の果実酒の製造に関わる方々に公表し、還元できればと考えています。



庄原市民公開講座

「暮らしの安心と安全を見つめる」と題し、庄原市教育委員会と共催で県立広島大学市民公開講座を今

回	講座名	講師
1	生活の中の空気環境	生命環境学部 教授 西村 和之
2	地球温暖化の影響と取り組みについて	生命環境学部 教授 原田 浩幸
3	放射線から身を守る	生命環境学部 教授 加藤 一生
4	牛乳の安全性	生命環境学部 准教授 津田 治敏



講座風景

年度も11月4日、10日、17日、25日の日程で開催しました。現在、食の安全、水の安全、大気汚染など、身のまわりの身近な生活の安心、安全が脅かされる報道が多くなされており、それらの問題を受講生と考える講座となりました。加えて、何年も前から問題になっている地球温暖化など、長期的にどう人間が地球と共生できるかを今回の講座では扱い、庄原キャンパスの生命環境学部の専門性を活かした講座となりました。新たな教員の講座もあり、市民と教員の出会いとしてもふさわしいものでした。延べ80人の市民が出席され、3回以上出席された20名の方に修了証書を渡しました。

公開講座

今年度も昨年度に続き、「大人のための高校教養講座」を開催し、ホットな話題について市民の方々と話をしました。9月30日、10月7日、14日、



講座風景

19日の4回で各回のタイトルは表のとおりです。この講座は高校の授業になぞらえて、現代社会の問題を考えることを目的としています。受講生からも好評で、同様の講座の継続を望む声も多く出ました。庄原キャンパス所属の2名の教員に加え、広島キャンパスからも2名の教員が講師となり、広く本学のシーズを活用した講座となりました。受講生からは、「本日の英語、久しぶりにきたえられた感じですがごく感動しました。」や、「1回目はトマ・ピケティの本の解説でしたが、解説本をすでに読んで参加したのでわかりやすかったと思います」等の感想をいただきました。来年度も形を変えて、時事問題を考える講座を実施したいと思います。延べ59人に参加いただきました。

回	講座名	講師
1	「公民(政治経済)」経済格差の現状について ～トマ・ピケティの問題指摘を巡って～	経営情報学部 教授 片桐 昭司
2	「公民(現代社会)」憲法の基礎 ～立憲主義・憲法改正について～	総合教育センター 講師 岡田 高嘉
3	「現代文」心の読み書き ～夏目漱石「こころ」を巡って～	生命環境学部 教授 遠藤 伸治
4	「英語」どうなる? 日本の英語教育	生命環境学部 教授 馬本 勉

研究紹介

酵素化学，脂質化学を中心とした食品化学

生命環境学部生命科学科 准教授 山本 幸弘



酵素は、生体内における様々な化学反応の触媒として、重要な役割を果たしています。動物の体温付近において複雑な反応を進めることが出来る酵素は、工業的・モノづくりの道具としても非常に有効です。一方、脂質は三大栄養素の一つでもあり、人にとって無くてはならない栄養素として知られています。脂質といえば「太る」というイメージをもたれる方が多いですが、エネルギー源としての役割のみならず、脂溶性ビタミンや生体内におけるホルモンや生理活性物質の材料でもあり、健康的な生活をするうえで欠かせないものです。しかし、これらの中には天然に存在する形では、吸収効率が低かったり、安定性に欠けたりするものも多いです。そこで、一つの解決手段として前述の酵素を利用して、生理活性化化合物をより有効な供給形態へと変換する研究を行っています。この他、食品の品質に大きな影響を及ぼす脂質酸化について、そのメカニズムや防止方法に関する研究、食品あるいはその製造工程で生じる未利用資源の有効利用に関する研究など、酵素化学、脂質化学を中心とした食品化学に関する研究を進めてゆきたいと考えています。

教育条件と教育成果の関係

生命環境学部環境科学科 准教授 藤井 宣彰



近年、教育関係者には客観的な根拠を示すことが求められてきています。例えば、教育予算の増加が学力向上や問題行動の減少につながるのかという議論です。学校や自治体が学力向上を重視する傾向が強くなっています。しかし、学力には学校の指導だけではなく、家庭の状況が影響します。これは子ども自身では変えられず、学校も直接関与できることは限られます。私は限られた資源のもと、学校や教育行政が子どもの成長を支援するためにできる方策について考えたいと思っています。

元々は低学力ながら後に学力が向上した子どもについての分析から、国語はもちろん、教科を問わず書くことに重点を置いた学習指導や、家庭学習の習慣付けの大切さが示唆されます。しかし、学習のみでなく、規則正しい生活、社会への関心、周囲の人々との交流、成功体験などが必要だと考えられます。学校の取組では、少人数での学級編制や学習指導を行っている学校が学力を向上させていました。

子どもや家庭が多様化し、学校が向き合う課題が複雑で困難になり、教員の多忙感は深刻です。そこで、教員以外に学校外の専門人材を配置して学校の職務を担うことが検討されています。外部人材との連携における課題や成果に注目したいと考えます。

地域連携

どんぐりカフェ in 三軒茶屋③

[3パート報告の第3回目]



今回の企画は学生有志によるもので、農林業ボランティアサークルやピザ・燻製サークルなどのサークル活動によるものではないところがトライアルかつ特徴的な内容だと言えます。このような経験は参

加学生にとってまたとない実践&フィールド学習にもなります。従って、教員（大学サイド）としても地域連携活動に学生たちが安全かつ安心して参加できるようにきっちりとした制度をつくることが必至であることも分かりました。本企画を通じて我々にも解決すべき課題を託されたような気がします。ともあれ、この企画を1回だけに終わらせるのは勿体なく、2回、3回と、地域活性化のための学生企画が今後とも続けられることを“とてとても”期待しています。頑張れ、県大ガールズ!!

(企画担当&文面監修：環境科学科4年(実施当時3年) 渡邊 真奈実, 文責：生命科学科 准教授 阪口 利文)

三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

地域貢献

第26回トライアスロンさぎしま大会

8月30日、三原市佐木島にて開催された「第26回トライアスロンさぎしま大会」に本学の教員3名、学生45名が大会実行委員、ボランティア、そして選手として参加しました。



本大会は、島の活性化を目的に1990年よりほぼ全ての島民の皆さんにより運営されています。人気は高く、全国から参加応募があります。今回は過去の実績をもとに選ばれた個人367名、チームリレー41組、計490名により行われました。



高齢化が進んだ島で、本学学生の若い力が非常に期待されています。大会実行委員として教員2名が参加し、学生のボランティア参加のための連携・調整を行いました。学生にとっても恒例かつ楽しいイベントで、ボランティアあるいは選手として積極的に事前の準備をしてくれました。

大会前日は雨で、雨中の大会決行が危ぶまれました。トライアスロンには自転車競技が含まれます。これは時に自動車・バイク並みのスピードとなるため濡れた路面は非常な危険を伴います。幸い当日朝には降り止み、スタート時には路面はほぼ乾いた状態となりました。曇り空で強い日差しはなく、むしろ絶好のレース日和となりました。

本学学生の活動は高い評価をいただきました。ボランティアとしての仕事ぶりや積極的な選手への声援は、大会関係者、選手の皆さんいづれにも好評でした。また、学生間の連携を通じてボランティア活動が行われ、互いの結びつきが一層高まったようです。

また選手として教員2名、学生7名、計9名からなる3チームがチームリレー部門に参加し、20位、15位、そして3位として完走し



ました。最高3位の成績は、大会関係者にも驚きを持って迎えられました。

本大会への参加は、地域貢献に果たす役割だけでなく学生教育の意味も大きく、継続して行っていきたいと思っています。

(保健福祉学部理学療法学科 助教 武本 秀徳)



生涯学習

《三原シティカレッジ》

「ちょっと気になる子の理解と支援」

7月から12月にかけて計5回、講座を開講しました。この講座では、子どもの発達が気になったら、どこに相談に行ったらいいのか？ どのような支援をしてくれるのか？ など、各回テーマを変え、保護者や教育関係者など、延べ367名の方々が受講されました。参加した保護者からは、「これからの子育てに活かしていきたい」、「子どもの見本になる様に、気をつけたい」等、沢山の感想が寄せられました。

夏休み特別講座

「オンリーワン工作 ～自由に楽しく作ろう～」

7月から8月の夏休み期間中に、小学生・幼児を対象に計5回、夏休み特別講座を開講しました。参加者数は延べ219名となり、沢山の子どもたちが教室は大賑わいでした。この講座では、まず自分が作りたいものを決め、必要な材料や道具を考え、毎回楽しみながら作品を作り、最後には自分の作ったものについて発表しました。参加した児童からは、「作品を作るのは難しかったけど、出来て嬉しかった」等の感想が寄せられ、また保護者からも「子どもが生き生きと作品に取り組んでいる姿を見て楽しかった」「親子での作業はとても貴重な経験だった」等、たくさんの感想をいただきました。

研究紹介

聞こえにくい子どもたちの育ちの支援

保健福祉学部コミュニケーション障害学科 講師 佐藤 紀代子

耳の聞こえにくい赤ちゃんが、超早期に診断される時代になりました。お母さんが赤ちゃんのお世話をしながら“この子、聞こえにくいかも”と気づくのではなく、まだ笑いもしない時に難聴が告げられるようになりました。このため、赤ちゃんを育てようとする意欲さえも無くしてしまうお母さんもいます。

聞こえにくい赤ちゃんでも適切な療育と補聴があれば、話すこと、聞くこと、コミュニケーションを取ることが可能になります。そして、学校に行き、職業を選択し、社会にでて、自己実現していきます。そのためには、早期発見と早期補聴、療育はなんといっても必要な条件なのです。

しかし、何かうまく事が運ばないことがあると子どもの状態には様々な問題が起こります。また、問題は思春期や社会に出てから見えてくることもあります。

聞こえにくい子どもたちの育ちを支援していくために医療機関、療育機関、学校とよい連携組織をもちながら、地域に根ざした支援システムを考えていきたいと思っています。三原キャンパスの附属診療所でも難聴と診断された赤ちゃんとお母さんが、数人受診されています。皆様のご協力、ご支援をいただきながら、できることをしていきたいと思っています。どうぞよろしくをお願いします。

研究紹介

記憶機能の加齢変化に関する研究

保健福祉学部コミュニケーション障害学科 教授 伊集院 睦雄

人間の記憶には、加齢により衰える機能と衰えない機能があります。例えば高齢者は、昨日の夕食に何を食べたかなどの、自分に起こった特定の出来事に関する記憶を思い出すことが苦手です。ただし「昨日の夕食は煮魚でしたか？ カレーでしたか？」と尋ねられれば、大抵は答えられることから、高齢者では記憶する能力自体が衰えているのではなく、それらをうまく思い出すことができないことが分かります。また、テレビを見ていて、知っているはずの俳優や歌手の名前が出てこないという「喉まで出かかっている状態」は誰も経験することですが、その頻度は歳を重ねるにつれて確実に増加していきます。

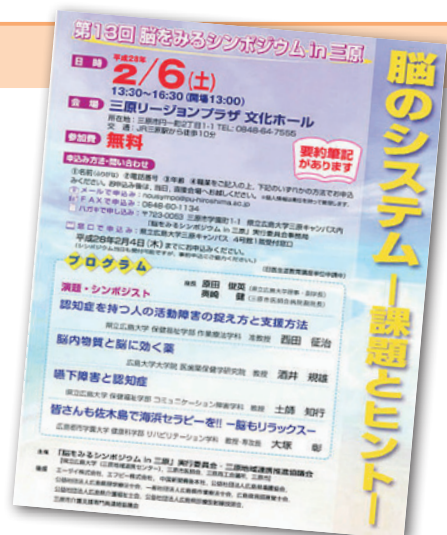
一方、数秒の間だけ情報を保持しておくための記憶機能は、若年者と変わらないというデータがあります。さらに高齢者の記憶の中には、長年の経験により多くの知識が蓄積されており、特に語彙数は若年者より約30%程度多いことも分かっています。

人間の記憶機能には、加齢の影響をもろに受けるものと、比較的保たれるもの、さらには若年者を凌駕するものがあり、年齢を重ねても一様には低下しない複雑な仕組みを持っているようです。今後はこうした基礎研究だけでなく、地域の皆様のご協力を得ながら、高齢者の方が、記憶を含めた認知機能の加齢変化に対してストレスのない生活を送っていただくための研究を進めていきたいと考えています。

◆◆◆ 第13回 脳をみるシンポジウム in 三原 ◆◆◆

2月6日、三原リージョンプラザ文化ホールにて開催された今回のシンポジウムは、今年で13回目となります。

今回のテーマは、『脳のシステム —課題とヒント—』と題し、4名のシンポジストをお迎えし、認知症や嚥下障害など、脳に関する身近かつ先進的な幅広い演題でシンポジウムを開催しました。参加者は、看護師やケアマネージャーなど専門職の方や、主婦、学生など290名を数え、“脳”について理解を深める良い機会となりました。



第16回広島保健福祉学会学術大会・第12回広島保健学学会学術集会 合同学会

10月10日に第16回広島保健福祉学会学術大会および第12回広島保健学学会学術集会の合同学会を本学で開催しました。本学保健福祉学部と広島大学医歯薬保健学研究院が合同で開催する本学会は、今年で5回目となります。本学会は、両大学間の連携を図り、地域の保健・医療・福祉の促進や向上に寄与することを目的としています。

今回、学会のテーマを「認知症の現状と展望」として企画しました。高齢化や医療費の問題は、団塊の世代が10年後、75歳以上になる2025年からはさらに深刻な問題となるからです。そこで、認知症高齢者のケアについて、先進的な取り組みが行われている、医療法人社団きのこ会きのこエスポール病院院長の佐々木健先生に特別講演をお願いしました。また、認知症対策は、多面的な取組が必要となるため、日本をはじめドイツ、中国の各国からシンポジストをお迎えし、認知症対策の現状についてシンポジウムを行いました。一般演題発表では、保健・医療・福祉に関する研究分野から15題のポスター発表が行われ、日頃の研究成果を発表するとともに、活発な意見交換・情報交換の場となりました。



佐々木院長による特別講演の様子

本学会は大変盛況で、看護師やケアマネージャーなど専門職の方や一般市民の方など、200名以上の参加があり、アンケート調査では9割以上の方が「満足であった」と回答をいただきました。参加者からは、「特別講演では、医師の視点から認知症の知識を伝えて頂き、大変勉強になった。シンポジウムでは、日本・ドイツ・中国の3カ国の比較が出来て良かった」、「隣の大学で、このような発表（学会）が聞けるのはとても良い事だと思う」等、沢山のご意見・ご感想が寄せられました。



シンポジウム後の討論の様子

本学会にご参加いただいた皆様、また合同学会の企画運営に御尽力いただきました両大学の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

(第16回広島保健福祉学会学術大会・第12回広島保健学学会学術集会 合同学会 会長
保健福祉学部 学部長 小野 武也)

地域連携センター報は本学ホームページにバックナンバーを掲載していますので、ご活用ください。
地域連携センターの活動についても、あわせてご覧ください。

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/>

編集後記

センター報第22号をお届けします。本号では、「里山資本主義」で著名な藻谷浩介氏による本年度県立広島大学学術講演会についてご紹介させていただきました。今年度後期のトピックスとして、各キャンパスでの活動、シンポジウム、地域連携、公開講座の報告、研究者紹介なども載せています。今後も地域に開かれた大学として様々な事業に取り組んでまいりますので、引き続き本学の活動にご支援、ご協力いただきますようお願いいたします。(S.K.)

編集発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
電話(082)251-9534 / E-mail: renkei@pu-hiroshima.ac.jp
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/>

各キャンパス問合せ先

県立広島大学庄原地域連携センター [本号編集担当]
〒727-0023 広島県庄原市七塚町562番地
電話(0824)74-1704 / E-mail: gakuju@pu-hiroshima.ac.jp

県立広島大学三原地域連携センター

〒723-0053 広島県三原市学園町1番1号
電話(0848)60-1200 / E-mail: mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp